

一心寺かわら版

第七号 平成十八年五月発行

「御同朋の道」

先日「知らず知らずのうちに」（愛媛県・村上弘徳師、本願寺新報）という題名のご法話を目にしました。その内容が私も経験したことのあるもので、親近感を覚えました。

「先日、ご門徒の家へ法事にお参りしました。その家には三歳の男の子がいました。非常に元気のよいその子にとって、家族や親戚が大勢集まる法事の場合は、お祭りのように思えたのか、いざおつとめが始まると、あつちこつち所狭しと走りまわるのです。

最初は親戚の方々が「元気のいい子だね」と、優しく話し掛けていたのですが、時間が経過するにつれ、家族の人に「静かに座っていなさい」と注意されるようになり、最後にはその子の足音一つ聞こえてこなくなってしまうのです。

休憩となり、私が後ろを振り返ってみますと、その男の子の姿が見えません。

「あれ、子どもさんの姿が見えませんが、どこに行かれたのですか？」と尋ねますと、お母さんが「あまりにも騒がしいので、お寺さんに迷惑かけてはいけなさいと思ひ、別の部屋でテレビを見させています」と返ってくるのです。

「私には何の迷惑もかかっていませんよ。一緒にお参りさせて

あげてください」と申しました。そうすると、男の子はうれしそうな顔をしながら仏間に戻ってきたのです。

みなさんにもこのような経験はなかったですか？この男の子を見てみると、私も同じような経験をしたことを思い出しました。幼い頃の私も、仏事の時は本堂や廊下を走りまわり、両親や祖母によく怒られました。

「せっかく広い部屋があるのだから、遊ばせてくれてもいいじゃないか」とか、「足が痛いから座りたくない」と反抗していたものです。

ところが年を重ねていくうちに、本堂であればほど騒いでいた私が、いつの間にか、心静かに手を合わす習慣が身につくようになっていました。「いつの頃から手を合わすことができるようになったのだろう」と自問してみても、私自身思いつくことができません。

ただ言えることは、両親や祖父母、親戚の方がそうされている姿を見聞きして育っていくうちに、自然と自分のものとして身に付いてきたとしか考えられないのです。みんなが静かに座っているから私も静かに座り、みんなが手を合わせているから、そのまねをして手を合わすというように、知らず知らずのうちにお育てにあずかっていたのです。

親鸞聖人は「正信偈」の中に「煩惱、眼（まなこ）を障（さ）へて見たてまつらずといへども、大悲、倦（ものう）きことなくしてつねにわれを照らしたまふ」と示されています。煩惱の身には、阿弥陀さまのお慈悲は見えないけれど、阿弥陀さまは片時も

休むことなく私たちの煩惱の闇を照らし続けていてくださる、とおっしゃられます。

子供が騒ぐからといって別の部屋へ連れていくのではなく、今、走り回っているこの子にも常に如来の大悲がそそがれていると味わいたいものです。

そして時には優しく教え、時にはきびしく注意して、親子が一緒にお仏壇の前に座り、「ナンマンダブツ、ナンマンダブツ」と、お慈悲のよび声を聞かせていただくことが大事なのです。そうすれば、大人は大人なり、子どもは子どもなり、そして私は私なりに、如来の大悲が自ずから体全体に浸透されてくるのだと自身の経験から思うことです。

『教行信証』には「前(さき)に生れんものは後(のち)を導き、後に生れんひとは前を訪(とぶら)へ、連続無窮(むぐう)にして、願はくは休止(くし)せざらしめんと欲す」というお言葉があります。

先に生まれた人は子や孫を導き、後から生まれたものは親や祖父母の生きざまに自らの道を見いだしていく、そんな終わりのない阿弥陀さまのお育てをお示しになっています。

阿弥陀さまのみ教えは亡くなったら終わりというみ教えではなく、親から子や孫へと伝道されていくみ教えなのです。そして、先に往生された方々のいのちが、いま私の上で生き続け、

はたらいてくださる世界がここにあるのです。だから家族一緒に、



阿弥陀さまのお慈悲に照らされてここにいることがありがたいです。」

以上、抜粋しましたが、昨今は核家族世帯が多くなり、世代を超えて大切なことを伝えていくことが難しくなっているようです。しかし、親鸞聖人が「前に生れんものは後を導き、後に生れんひとは前を訪へ」とおっしゃるように、大切なことは聞き伝えていかななくてはなりません。

五木寛之さんは著書『人生の目的』の中で人生を、一寸先も見えない闇夜の道程に例えて、私の行く道を照らしてくれる光を他力(阿弥陀仏の本願力)といいあらわし、その光なくしては不安と恐怖で体がふるえるとおっしゃいます。その光の存在を教えるのが先に生まれたものの役目でしょう。

現代に生きる私たちは生き方に迷い、苦しんでいるように思います。あまりに多くの情報が与えられ、その中から道を選ばなくてはならないため混乱して何が大切か迷い、また、自由ばかりが主張されるために他のいのちを思いやることを忘れつつあるようです。

ある念仏者は「私は手本にはなれないけれども、見本になるこ



とはできる」とおっしゃったそうです。人間は良い行いもしませんし、残念ながら煩惱にとらわれて悪いこともしてしまいます。そういう煩惱に悩み苦しむ身でありながら、ただひとつ、私を浄土へと願い続けて下さっている仏さまとすべてのいのちに手を合わせ、感謝していくことのできる人生こそありがたい、ということをも身をもって示し、それが伝わっていくことを願うのが真宗門徒でしょう。

聞法だけにとどまらず、自らの姿をもって後のものに真実の生き方を、そして仏の願いを伝えていく御同朋の道を歩みたいものです。

お経ってなあに？④表白

法事では伽陀（かだ）に続いて表白（ひょうびやく）があげられます。一つ代表的なものをあげます。

敬うて弥陀願王教主釈迦如来 念仏伝来の諸大師等に白して言さく

それ以（おもんみ）れば 南浮人身（なんぶにんじん）の生をうけ 稀に西土仏教のうききに遇い 宗祖親鸞聖人の化導に依りて 法蔵因位（ほうぞういんに）の本誓を聞く 歡喜胸に満ち渴仰（かつごう）肝に銘ず 然れば即ち報じても報ずべきは 大悲の仏恩 謝しても謝すべきは師長の遺徳なり

本日ここに釋○○の○回忌にあたり 有縁の眷属（けんぞく）

相集まり 仏事を営み 仏祖報恩のため 大乘の經典を誦誦（どくじゆ）し奉る

願わくは 蓮華蔵界（れんげぞうかい）の中にして今の講肆（こうし）を照見し檀林宝座（だんりんほうざ）の上より この梵ねんに影向（ようごう）したもうらんことを 敬うて白す 哀愍納受（あいみんのうじゆ）したまえ

【現代語訳】

私を救う本願念仏を建てられた阿弥陀仏、その教えを説いて下さった釈迦如来とそれを伝えて下さった方々に敬って申し上げます。

考えてみれば、ここに人としてのちを賜り、親鸞聖人によって浄土のみ教え、阿弥陀仏の本願念仏に出遇わせていただいたことを喜び、肝に銘じております。ですから仏さまと道を示して下さった方々に感謝し、ご恩に報いなければなりません。そこで法事を営み、ご縁のあったものが集まり、その恩に報いるべく仏さまの声としてお経を読み聞かせていただきます。浄土におられる仏さまはこの法座を見守り、回向下さいますよう敬って申し上げます。慈悲の心をもってお受け下さい。

表白とは、私を浄土へと導いて下さる阿弥陀仏、それを教えて下さったお釈迦さまと伝えて下さった方々に対して宣言されるものです。その場に集うものがみな、この表白の心で法事に臨ませてくださいませ。